

# トロロープとアメリカ

## ——小説に描かれるアメリカ人女性キャラクター——

### Trollope and America : American Women Characters in His Novels

香山はるの

#### 要 旨

本稿ではアントニー・トロロープとアメリカの関係を、小説に描かれるアメリカ人女性キャラクターを分析することによって、考察した。1850年代後半から1880年代にかけてトロロープの小説には、多くのアメリカ人女性が描かれている。たとえば、50年代後半の短編、“The Courtship of Susan Bell”における「家庭の天使」のようなヒロインや *He Knew He Was Right* や *The Duke's Children* における美しく、才気溢れるアメリカ東部出身の女性たち、戦闘的なフェミニスト、美しくも危険な「堕ちた女」など、そのタイプは様々である。そして、それぞれのキャラクターの描写には、トロロープの憧れや疑問、嫌悪、同情など、複雑な思いの反映が認められるのである。そうした背景には、特に、トロロープの1860年代における二つの経験—すなわち、生涯友情を育むことになるアメリカ人女性、ケイト・フィールドとの出会いと1861年9月から62年の3月に亘る二度目のアメリカ滞在—の微妙な影響があると考えられる。たとえば、トロロープは、ケイトのフェミニズム思想に反対しながらも、彼女の知的な魅力に強く惹かれていた。また、旅行記 *North America* の記述にも見られるように、彼はアメリカの文化に反発を覚えながらも、自国の価値観を基準としてこの「新世界」を評価すまいという、寛容で柔軟な姿勢を取っていた。そうしたトロロープの「アメリカ」に対するアンビヴァレントな態度、また、翻って、イギリスの伝統的な価値観をあらためて問い直そうとする姿勢は、特に *The Way We Live Now* のアメリカ人女性、ウィニフレッド・ハートルの描写に最もよく表れていると思われる。トロロープは「家庭の天使」の理想像を掲げながらも、この「堕ちた女」ハートル夫人の苦悩や悲しみを鮮やかに描き出すことで、彼女を拒み続けるイギリス社会の「ダブル・スタンダード」に疑問を突きつけているのである。

アントニー・トロロープ (1815-82) とアメリカの関わりは深い。1827年母親 Frances Milton Trollope (1779-1863) が一家の苦しい家計を救うべくアメリカに渡り、数年後その見聞をもとに *Domestic Manners of the Americans* (1832) を書いたことはよく知られているが、トロロープ自身も生涯にわたり、五回の訪米をしている (1859、1861-62、1868、1872、1875年)。特に、二度目のアメリカ滞在の後、1862年5月に出版された旅行記 *North America* は、トロロープ自身がその序章で示唆しているように、母親の旅行記が引き起こしたアメリカ人の反感を緩和したいという気

持ちで書かれたという点 (5)、そして、それ以降に書かれた彼の小説にも様々な影響を与えた点で興味深い。実際、Helen K. Heinemanが *Three Victorians in the New World* の中で論じているように、アメリカ、アメリカ人について専ら否定的な見解を辛辣に書き綴ったフランシスの本に対し、トロロープの旅行記は「寛容で適応力のある旅行者」の視点から書かれ、「批判」と「賞賛」が微妙なバランスで入り混じっている点が特徴的である (185, 193)。そして、そこには異なる文化との触れ合いを通してその価値観の是非を問うにとどまらず、翻って自国の文化をもあらためて客観視するという側面が見られるのである。こうした旅行記に見られるトロロープの姿勢は、以後の小説におけるアメリカ人の描写に顕著に表れていると思われる。本稿ではトロロープが1850年代後半に書いた短編、そして *North America* を生んだ二度目のアメリカ訪問以後の短編、長編を取り上げ、主としてそこに描かれているアメリカ人女性キャラクターに焦点を当てて論じてみたい<sup>(1)</sup>。さらに、こうした女性キャラクターと旅行記 *North America* との関係、そしてトロロープの伝記的要因について探りながら、彼が抱いていた複雑な思いや作家としての葛藤を追求していきたい。

“The Courtship of Susan Bell” (1859) は、トロロープがアメリカを舞台にして書いた初めての短編であり、トロロープの最初のアメリカ訪問の後に執筆されたものである。ニューヨークのサラトガ・スプリングス (Saratoga Springs) に住むヒロイン Susan Bell が、狂信的ともいえるバプティストの母親と姉 Hetta の反対を克服して誠実な青年 Aaron Dunn と無事結ばれるまでの経緯を描いたこの短編には、トロロープがアメリカからイギリスに戻る船上で知り合ったアメリカ人の親子、Harriet Knower 夫人と娘 Mary の影響が見られると言われている (Mullen, 104)。また、Richard Mullen が指摘するように、この作品にはアメリカにおける言葉や宗教的な慣習などをトロロープが熟知していた点が伺え、興味深い (104)。しかし、他方、この作品のヒロイン、スーザンはトロロープの前期の小説にしばしば描かれる純粹で従順な「家庭の天使」ともいうべきキャラクターであり、後の作品においてアメリカ人女性キャラクターが発揮する旺盛な独立心やエネルギーで開放的な魅力はあまり認められない。

トロロープのアメリカ人女性キャラクターの描写に大きな変化が見られるのは、1860年代前半である。それは、生涯にわたり親交を深めることになるアメリカ人女性 Mary Katherine Keemle Field (1838-96。以下 Kate Field と記す) との出会い、そして1861年から62年にわたるアメリカ滞在における体験によるところが大きいと思われる。Kate Field はアメリカ人の作家、女優であり、また女性の権利を擁護する講演を行うフェミニストでもある。1860年10月にフィレンツェにある兄 Thomas Adolphus Trollope (1810-92) の家で出会って以来、トロロープはこの20歳以上も年下の才能ある美しい女性に対し、半ば父親が娘に抱くようなある種の愛情を抱くことになる (*Letters I*, 126)。トロロープのケイトに宛てた数々の書簡には、彼がこの活発で知的なアメリカ人女性に対して強い魅力を感じていたこと、また、彼女の作品や講演について常に関心を持ち、安定した取

入のないケイトの身の上を案じていたことが鮮明に表れている。

また、多くの読者はトロローブの *North America* には、たとえばディケンズの旅行記 *American Notes* (1842) と比べ、女性に関する描写が多いことに気づくであろう。概してディケンズが、監獄や病院、学校等の施設や奴隷制度の問題に多くの頁を割いているのに対し、トロローブは南北戦争の只中にあるアメリカ市民の暮らしぶりや人間観察により強い関心を示しているように思われる。とりわけ、アメリカの女性に関しては、その外見や態度、教養、さらには当時盛んに議論されていた「女性の権利」の問題にまで亘って多くの記述が見られるのである。たとえば、トロローブは24章で “All native American women are intelligent. It seems to be their birthright. In the eastern cities they have, in their upper classes, superadded womanly grace to this intelligence, and consequently they are charming as companions” (400) と賞賛する一方、権利ばかり主張する「あつかましく」「無作法な」女性たちを随所で批判している。とりわけ17章、“The Rights of Women” でトロローブはDalls夫人に代表されるアメリカの戦闘的なフェミニストに対し、激しい反発を示している<sup>(2)</sup>。“Let women say what they will of their rights, or men who think themselves generous say what they will for them, the question has all been settled both for them and for us men by a higher power...The best right a woman has is the right to a husband” (265)。

こうしたトロローブのアメリカ人女性に対する複雑な思いは、60年代前半から80年代にかけて書かれた短編、長編に微妙に反映していると思われる。たとえば、1863年の “Miss Ophelia Gledd” は、ボストンの人気者 Ophelia Gledd がたくましいアメリカ人青年 Hannibal H.Hoskins と15歳年上で上流階級出身のイギリス人 John Pryor の二人から求婚され、悩んだ末後者を選ぶというストーリーであるが、二つの点で特に意義深いと思われる。まず、トロローブが才気溢れる生き生きとしたアメリカ人のヒロインを初めて描いた作品であること、そして、トロローブが「アメリカ」を「イギリス」との関係から捉え、描き始めたことである<sup>(3)</sup>。語り手（イギリス人 Archibald Green）は、自由奔放なオフィーリアの行動に強く惹かれつつも、そこにイギリス人女性の行動とは異なるものを見、次のように問いかけざるを得ない。“Will she or will she not be received in London as a lady?” (419) これは、トロローブの描く「アングロ・アメリカン」の結婚における中心的なテーマであると言えよう。以後、*He Knew He Was Right* (1869) や *The Duke's Children* (1880) 等の長編においても、トロローブはこの問いを追求していく。

*He Knew He Was Right* の Caroline Spalding や *The Duke's Children* の Isabella Boncassen は、Helen K. Heineman の言うトロローブの「才気溢れる可愛いアメリカ東部の女性」である (245)。同時代のディケンズと同様、トロローブはアメリカの荒々しい西部より、洗練された東部を好む傾向があった。本稿の最初に挙げた引用でも示唆されているが、殊に東部の「聡明」で「上品」な女性を彼は高く評価しており、小説の中でも、こういった東部出身のヒロインをしばしば、家柄の優れたイギリス人紳士と結婚させている (Heineman, 245)。前述のオフィーリア・グレッド、

そして以下で論じる *The Duke's Children* のイザベラ・ボンカッセンや *He Knew He Was Right* のキャロライン・スポールディングに多くの批評家がケイト・フィールドの面影を見ているのは興味深い (Heineman, 245.)。

イザベラとキャロラインには多くの共通点がある。中でも特筆すべきは、その美しさと賢さ、独立心、率直さ、自由闊達な気質であろう。たとえば *The Duke's Children* の27章には、イザベラの容姿が詳細に描写されているが、その生き生きとした表情を通して、トロロープが単なる外見の美しさを超えた、豊かな感受性や知性など、イザベラの内面的な魅力を示唆している点が興味深い。

Isabel Boncassen was certainly a very pretty girl...her figure was perfect...Her hair was dark brown and plentiful; but it added but little to her charms, which depended on other matters...It was...the vitality of her countenance,—the way in which she could speak with every feature, the command which she had of pathos, of humour, of sympathy, of satire, the assurance which she gave by every glance of her eye, every elevation of her brow, every curl of her lip, that she was alive to all that was going on,—it was all this rather than those feminine charms which can be catalogued and labelled that made all acknowledge that she was beautiful. (218-19)

こうした溢れ出る魅力は、彼女の「<sup>ライバル</sup>恋敵」—打算的で感情を見せないイギリス人 Lady Mabel Grex—にはないものであり、言うなれば、Lord Silverbridge が最終的にイザベルを選んだ決定的な要因と思われる。

また、このイザベラや *He Knew He Was Right* のキャロライン・スポールディングが、小説の中で、階級と深く関わるイギリスの伝統的な価値観に疑問を投げかける役割を担っていることは重要であろう。たとえば、*The Duke's Children* の31章、“Miss Boncassen’s River-party. No.1”におけるシルヴァーブリッジとイザベラの次の会話は興味深い。“I have heard you say, Miss Boncassen, that Americans were more likable than the English.’ ‘Have you? Well, yes...I’d sooner have to dance with a bank clerk in New York, than with a bank clerk here.’ ‘Do you ever dance with bank clerks?’ ‘Oh dear yes...I dance with whoever comes up. We haven’t got lords in America, you know!’” (246) また、*He Knew He Was Right* の46章で、キャロラインは知り合って間もない Charles Glascock に、アメリカ訪問の話を勧めつつも、からかいの言葉を加えるのを忘れない。“You wouldn’t like it at all...because you are an aristocrat...One half of the people would run after you, and the other half would run away from you” (433). このように、イザベラ、キャロラインは、未来の “Duke” や “Lord” たちと気後れすることなく、いわば「平等」の立場で親交を深めようし、そうした自尊心

をトロロープは賛美しているように思われる (Morse, 134)。実際、イザベラもキャロラインも自分がシルヴァーブリッジ、グラスコックと結婚した場合、イギリスの上流社会に受け入れてもらえるかという不安を一時抱くが、最終的には相手との愛情を信じてプロポーズを受け入れる。ある意味で、これが先の“Miss Ophelia Gledd”における問い (“Will she or will she not be received in London as a lady?”) に対するトロロープ自身の楽観的、希望的な結論ではないかと思われる<sup>(4)</sup>。イザベラとキャロラインの愛に基づく幸福な結婚は、シルヴァーブリッジの爵位を狙って打算を働かせるメイベルや、富と地位を目当てに娘ノーラをグラスコックと結婚させようと画策する Lady Rowley に象徴される、イギリス上流社会の腐敗した「結婚市場」に対する鋭い風刺と解釈できる。二人のアメリカ人ヒロインは、慣習が支配するイギリス上流階級に新たなエネルギーを注ぎ込むのである。

以上、オフィーリア、イザベラ、キャロラインと、三人の快活なアメリカ人ヒロインを論じてきたが、他方、数は少ないものの、トロロープのいわゆる闘争的なフェミニストのキャラクターについても、触れてみたい。

Sutherland も示唆しているように、トロロープの描く過激なフェミニストは、すべて「外国人」である点は注目に値する (xx)。たとえば、*He Knew He Was Right* の Wallachia Petrie はアメリカ人であり、*Is He Popenjoy?* (1878) の Baroness Banman と Olivia Q. Fleabody はそれぞれドイツ人、アメリカ人である。イギリス国内においても、1857年の婚姻事件法の成立を始め、1860年代には John Stuart Mill (1806-73) の活動など女性の地位の改善をめざす様々な動きがあったことは、よく知られている。しかしトロロープは作品の中で一貫して、フェミニズムを「外国から持ち込まれた異常な産物」(Sutherland, xx) として扱う傾向があった。これは、*He Knew He Was Right* の77章における語り手の皮肉なコメントにも示唆されている。“We in England are not usually favourably disposed to women who take a pride in a certain antagonism to men in general,...but there are many such in America who have noble aspirations, good intellects, much energy” (717)。実際、上に挙げたトロロープの三人の主要なフェミニストのうち二人がアメリカ人であることは興味深い。ここでは特に、作中でより描写の多い *He Knew He Was Right* のワレイキア・ピートリーを中心に論じたい。

ワレイキア・ピートリーは戦闘的な民主主義者、フェミニストで、また、「リパブリカン・ブラウニング」 (“the Republican Browning”) と、巷で呼ばれる詩人でもある。オリヴィア・フリーボディについての描写が、「ズボン」や「やたらと目立つ眼鏡」(161) など、いわゆる「女性らしくない」外見を強調するものが多いのに対し、ワレイキアの場合特筆すべきは、弁舌の激しさ、すなわち、アメリカ人特有の際立った鼻声で<sup>(5)</sup>、議論の相手を徹底的に侮辱し攻撃する、その凄まじさである。たとえば56章 “Withered Grass” でワレイキアは、ハムレットがホレイシヨウに向かって言う言葉を誤用して<sup>(6)</sup>、イギリスに対する猛烈な批判を行い、チャールズ・グラスコックを

憤慨させる。“Between you and us, Mr. Glascock, the spark of sympathy does not pass with a strong flash,...The antipathy is one...which has been common on the face of the earth since the clown first trod upon the courtier’s heels” (529). 衝突を好まないグラスコックは何とか言い抜ける方法を探るが、ワレイキアはそうした気持ちをまるで意に介さない。むしろ彼女の攻撃は残酷なまでに過熱していき、グラスコックに抑えがたい嫌悪の念を引き起こす。

“You English have no sympathy with a people who claim to be at least your equals. The clown has trod upon the courtier’s heels till the clown is clown no longer, and the courtier has hardly a court in which he may dangle his sword-knot...I tell you that the courtier shall be spared no longer; -because he is useless. He shall be cut down together with the withered grasses and thrown into the oven, and there shall be an end of him.”...There were certain forms of the American female so dreadful that no wise man would wilfully come in contact with them...The personal incivility of which she had been guilty in calling him[Glascock] a withered grass was distasteful to him, as being opposed to his ideas of the customs of society. (529-30)

Jane Nardinら多くの批評家は、ワレイキアのキャラクターを専ら「カリカチュア」と見ている(211-12)。確かにトロロープの目的が主として風刺にあることは明白である。しかし、一方で、この「獰猛なアメリカ人フェミニスト」ワレイキアに関する描写には、僅かながら、ある種の同情的な視点も認められるように思われる。たとえば、ワレイキアが完全に「憎むべき悪役」キャラクターになっていないのは、彼女のキャロラインに対する愛情を読者が感じるからである。77章でキャロラインが、ワレイキアについてグラスコックに次のように言っているのは重要である。“I cannot expect you to understand as yet how it is that I love her and like her; but I do. If I were in distress to-morrow, she would give everything she has in the world to put me right” (721)。実際、ワレイキアにとってキャロラインは、自分を理解し愛してくれる唯一の人であり、生涯同士としてフェミニズムの闘いを共にしていきたい親友であった(717)。このような彼女にとって、キャロラインとグラスコックの結婚は心の拠り所を喪失することに他ならなかったろう。こういった角度から見ると、自己本位の動機からとはいえ、二人の恋愛を阻止しようとするワレイキアの言動には、ある種の哀れみすら感じられよう。二人の結婚が決まったとき、ワレイキアはグラスコックに次のように言い放つ。“You are about to take with you to your old country, Mr. Glascock,...one of the brightest stars in our young American firmament” (720)。こうした挑戦的な言葉の中にも読者は、この過激なフェミニストにも克服できない孤独の片鱗を見るのではないか。

Carolyn J. Moss のエッセイ、“Anthony Trollope and Kate Field”でも詳しく論じられているよう

に、ケイト・フィールドが *He Knew He Was Right* におけるワレイキアの描写はフェミニストである自分の考えを風刺したものと考え、トロロープに抗議をしたことはよく知られている (46-49)。1870年の春、ケイトに宛てた手紙の中で、トロロープがこの問題に対し微妙な返答をしているのは興味深い。“I never said you were like W. Petrie. I said that that young woman did not entertain a single opinion on public matters which you could repudiate” (*Letters I*, 509)。確かにワレイキアのキャラクターには、ケイトのフェミニズムを揶揄するトロロープの意図があったと思われるが、そこにはまた、独身を貫こうとするケイトの将来に対する懸念も反映されているのではないか。*He Knew He Was Right* の後半で語り手は、男性に敵意を燃やすフェミニストたちが、「結婚と半ダースもの子供」によって「治ってくれる」ことを望むと述べ、加えて、残念ながらワレイキアに関してはこのような期待はあまりできないと結んでいる (717)。1870年4月15日のケイトに宛てた書簡にも認められるように、トロロープもまた、独り身の彼女を不憫に思い、幸せな結婚をして家庭に落ち着くよう強く勧めている (*Letters I*, 509)。こうした点から見ると、たとえば、キャロラインとグラスコックとの結婚がいわば、Heineman の示唆するように、トロロープのケイトに対する「願望実現」であるとすれば (245)、ワレイキアの生き方は彼女の未来に対する一種の警告とも解釈できるのではないか。

トロロープはフェミニストに対しては概して批判的な態度を見せたが、一方、70年代、80年代に書かれた多くの小説では、男性中心の社会において女性が経験する様々な困難や葛藤に強い関心を示している。その一つが1874から75年にかけて書かれた *The Way We Live Now* である。

*The Way We Live Now* の Mrs. Winifred Hurtle は、いわば、トロロープの「アメリカ」に対する複雑な姿勢が最もよく表れた女性キャラクターであろう。ウィニフレッド・ハートルは35歳前後の美しいアメリカ人の未亡人で、Paul Montague がカリフォルニアに渡った際知り合い、結婚を約束した女性である。しかし、その後、オレゴンで男を銃殺した話など、彼女の怪しげな経歴がポールの耳に入り、また、帰国後彼が Henrietta Carbury (以後ヘッタと記す) という穏やかなイギリス人女性に心惹かれるようになったため、二人の関係に亀裂が生じる。ポールは手紙で別れ話を切り出すが、ハートル夫人は応じず、何としてもポールの心を繋ぎ止めようとイギリスに乗り込んでくる一彼女をめぐるストーリーはここから始まる。

R. D. McMaster も指摘しているように、トロロープは文化的、そして、セクシュアルな面において、ハートル夫人にアンビヴァレントな態度を示している (72)。第一に、ハートル夫人は「アメリカ西部」出身であり、彼女の血なまぐさい過去は「未開の荒々しい西部」の地と強く結び付けられていることに注目したい (Heineman, 243)。オレゴンで自分をレイプしようとした男を銃で撃ったという話や、飲んだくれの夫から身を守ろうと寝室の内側で銃を構えていたという話など、ハートル夫人の過去はポールや彼の愛する「家庭の天使」ヘッタにとって、想像を絶するものである。そして、このようなハートル夫人の断固とした行動をトロロープは「男性的」

(“masculine”)とし、概して否定的に捉えているようである (McMaster, 72)。“She had seen so much of drunkenness, had become so handy with pistols, and had done so much of a man’s work, that any ordinary man might well hesitate before he assumed to be her master” (I: 446-47). 実際、たとえば47章でハートル夫人は、自分を捨てようとするポールに「銃」の話を持ち出すが、こうした激しい性格は、彼の心をさらに「女性らしい」ヘッタへと向かわせることになるのである。

しかし、ハートル夫人の「男性的」な面を強調する一方で、トロローブは、荒れ果てたアメリカ西部で一人生きていくためには、彼女が時として「女性らしからぬ」振る舞いをせざるを得なかった事情を暗示している。“She had endured violence, and had been violent. She had been schemed against, and had schemed. She had fitted herself to the life which had befallen her” (I: 449). イギリスの伝統的な価値を信奉する Roger Carbury は「やかましく、男性的で、神を信じない」(II: 350) アメリカの女性に偏見を抱き、ハートル夫人に対して終始嫌悪を露わにする。しかし、読者はむしろ、過酷な環境をたくましく生き抜く彼女の、心の底から沸きあがるような悲痛な叫びに同情を感じざるを得ない。“Shall a woman be flayed alive because it is unfeminine in her to fight for her own skin? What is the good of being—feminine, as you call it?” (II: 8) これは、「暴力に暴力で抗するのは男性ならば許されるが、女性の場合は許されない」という、ロジャーやポールに内在する「ダブル・スタンダード」に対する抗議であり、また間接的には、彼女から離れていくポールに対する非難でもある。ハートル夫人にとってポールを失うことは、「まっとうな」新しい人生を手にする望みを失うことでもあり (Archibald, 167)、極めて受け入れ難い事態であったのだ。

また、トロローブが「ふっくらと肉付きのよい顔立ち」や「豊かな胸」など、ハートル夫人のいわば官能的な魅力を、繰り返し描写しているのも興味深い (McMaster, 72) <sup>(7)</sup>。“Her nose also was full, and had something of the pug. But nevertheless it was a nose which any man who loved her would swear to be perfect...Her chin was full, marked by a large dimple...Her bust was full and beautifully shaped” (I: 241). こういった性的な魅力はいわゆる「お人形」のようなヒロイン、ヘッタには見られないものである。このように、ハートル夫人のキャラクターには、トロローブの様々な—そして時に相反する—気持が反映し、奥行きのあるものになっているのである。

実際すさんだところがあるとはいえ、ハートル夫人の内面は純粹である。第一に、彼女のポールへの愛は無私のものであった。激しい苦悶の末、ポールのために自ら身を引いたハートル夫人の姿には、読者の心を打つものがある。とりわけ、97章における二人の別離の場面は痛ましい。

“Good-bye, Paul;—and now go.”...She stood still, without moving a limb, as she listened to his step down the stairs and to the opening and the closing of the door. Then hiding herself at the window...she watched him as he went along the street.



When he had turned the corner she came back to the centre of the room, stood for a moment with her arms stretched out towards the walls, and then fell prone upon the floor. She had spoken the very truth when she said that she had loved him with all her heart. (II : 447)

また、たとえば、91章でヘッタに見せた優しさや、下宿屋の女主人、Pipkin 夫人に施した経済的な援助、Ruby Ruggles を Felix Carbury の誘惑から守った正義感など、殊に小説の後半ではハートル夫人の美点が際立ち、むしろ、ヒロイン、ヘッタの影が薄くなっていることも注目し得る。ハートル夫人はロジャーやポールにとっては「墮ちた女」であったかもしれないが、ピプキン夫人やルービーを愛する John Crumb にとっては真の「レディー」(II : 350) に他ならなかった。語り手もまた“Mrs. Hurtle’s Fate”の章を次のような言葉で結んでいる。“I think...that Mrs. Hurtle, with all her faults, was a good-natured woman” (II : 448).

このように様々な面を併せ持つハートル夫人であるが、彼女の物語にどのような終止符を打つか—この点にトロロープは頭を悩ませたのではないか。五週間のイギリス滞在の後、ハートル夫人は、Madame Melmotte と Marie Melmotte、そして後者二人の婚約者の Hamilton K. Fisker と Her Croll と共に、リヴァプールからニューヨークに向かう船に乗り込む。ハートル夫人、マダム・メルモット、マリーの三人はいずれも形こそ異なれ、男性に手痛い心の傷を負わされたという点で共通している。マダム・メルモットとマリーはそれぞれ夫、父親である Augustus Melmotte の横暴な振る舞いに長年苦しみ、加えて、マリーはフィーリックス・カーベリーに捨てられた苦い経験を持つ。ハートル夫人とポールとの破局については、これまで見てきた通りである。出航に際し、三人の女たちはそれぞれ、悲しい思い出のあるイギリスには二度と足を踏み入れまいと心に誓う。そして、サン・フランシスコでマリーとフィスカーが結婚したという以外、読者は彼女たちのその後の生活について知らされることはないのである。

三人の女をめぐるこうした結末については、主に二つの見方が可能のように思われる。まず、怪しげな外国人は全て「健全な」イギリスから駆逐されたという解釈があろう。アメリカ西部におけるハートル夫人の過去については既に触れたが、メルモット一家についても、そのいかがわしさは、彼らの出自が「外国」であることと強く関連づけられている。オーガスタス・メルモットは「アイルランド系アメリカ人」(II : 449) という噂があり、「ユダヤ人の鼻と目」(I : 31) を持つマダム・メルモットは、英語が流暢に話せない。さらに、11章では、マリーの幼年時代に一家がアメリカやドイツに転々と移り住んだことが示唆されているが、マリーの記憶の中で、そうした日々が飢えや貧しさ、さらには父親の「もめごと」や「不在」と微妙に結びついているのは、興味深い。“She [Marie] could just remember the dirty street in the German portion of New York in which she had been born and had lived for the first four years of her life...Then she had run about

the streets of Hamburg, and had sometimes been very hungry, sometimes in rags,—and she had a dim memory of some trouble into which her father had fallen, and that he was away from her for a time” (I:106).

また、別の解釈をすれば、疑わしい経歴を持つメルモット母子とハートル夫人は、経済力を頼りに、より生きやすい新天地へ渡ったと見ることもできよう。この三人が、生まれや男女のあり方について古い価値観が根強く残るイギリス社会では、受け入れられにくいことは明らかである。他方、アメリカでは、マダム・メルモットは夫が残した財産の怪しげな出所について問われることはないであろうし、また、マリー・メルモットが、フィスカーと結婚し、サン・フランシスコで新たな生活に踏み出そうと決意したのは、アメリカでは妻の財産に対する法的な保障が得られるという期待に拠るところが大きい<sup>(8)</sup>。ハートル夫人も離婚に際し、ある程度の資産を勝ち得、経済的に余裕があることが示唆されている。

しかし、いずれの解釈にせよ、ハートル夫人の場合、アメリカで真の安住の地を見つけることができるのか、大いに疑問が残る。マダム・メルモットやマリーとは異なり、ハートル夫人は寄る辺のない独り身であり、また、故国アメリカでも彼女の暗い過去はよく知られているという (I:450)。さらに帰国後には、彼女との離婚は法的に無効であると訴える前夫との闘いが再開することが想像される。このように、トロロープはハートル夫人に対して、陰鬱な見通しの未来しか用意することができなかった。しかし、鮮やかに描かれた彼女のキャラクターは、ポールとヘッタ、ジョンとルービー、ニコラス・ブラウン (Nicholas Broune) とレディ・カーベリー (Lady Carbury) をめぐるハッピー・エンディングによっても、駆逐できない重い余韻を小説に残しているのである。

以上、1850年代の後半から1880年代に亘るトロロープの作品における主なアメリカ人女性キャラクターを見てきた。“The Courtship of Susan Bell” に描かれた「家庭の天使」のようなヒロインから、東部出身の開放的で美しいヒロイン、そして、熱狂的なフェミニストや「墮ちた女」まで、そのタイプは多様であり、それぞれのキャラクターに、トロロープの憧れや疑問、嫌悪、同情など様々な思いの反映が認められる。そして特に60年代以降の作品におけるこうしたキャラクターの描写に、トロロープのアメリカ滞在やケイト・フィールドとの親交が微妙に影響を与えていることは、既に述べた通りである。

Heineman も示唆しているように、トロロープの *North America* におけるアメリカ観は、ディケンズの *American Notes* のそれと比べ、概してより寛容で、異質な文化に対する高い受容力を示しているが<sup>(185)</sup>、これはフィクションにおけるそれぞれの女性キャラクターの描き方にも、象徴的に表れていると思われる。たとえば、*Martin Chuzzlewit* に登場するアメリカ人女性の描写は、極めて画一的である。その代表ともいえる「哲学者で作家」の Mrs Hominy は、「共和主義」を讃え、イギリスを批判する凄まじい弁舌でマーティン・チャズルウィットを辟易させるが、ディケ

ンズはいわば、「男性化」された「不自然な」女性として (Archibald, 147)、彼女のようなキャラクターを痛烈に風刺している。34章に登場する勿体ぶった「文学的な女性」、Miss Toppit と Miss Codger のキャラクターについても同様である。殊に、ホミニー夫人、トピット嬢とコジャー嬢の三人が、Elijah Pogram を交えて熱烈に議論を戦わせる場面は印象深い。“...being all four out of their depths, and all unable to swim, they splashed up words in all directions, and floundered about famously. On the whole, it was considered to have been the severest mental exercise ever heard in the National Hotel. Tears stood in the shrill boy’s eyes several times; and the whole company observed that their heads ached with the effort –as well they might” (615)。ここでは、ホミニー夫人たちの熱弁と聴衆の反応が、語り手がその肝心の議論の内容については全く触れないことで、より滑稽に描かれている。実際、ホミニー夫人の弁説が中身の無いものであることは、22章においても示唆されている。“It is no great matter what Mrs Hominy said, save that she had learnt it from the cant of a class, and a large class, of her fellow- countrymen” (435)。つまり、ディケンズはこの「近代のグラッキの母」(435) の思想についてはあまり関心を向けず、むしろ、たとえばマーティンに「悪夢」を見させるような彼女の猛烈な攻撃性を揶揄しているに過ぎない。このように、*Martin Chuzzlewit* におけるアメリカ人女性の描写は、カリカチュアの域を出ていないように思われる。

これに対し、トロロープのアメリカ人女性は概して、それぞれ強い個性と複雑な内面を備えたキャラクターである。一見ディケンズのホミニー夫人のような「カリカチュア」と思われるフェミニスト、ワレイキア・ピートリーについても、親友のキャロライン・スポールディングに対する愛情や彼女を失う寂しさなど、僅かながらも彼女の内面世界が示唆されている。また、キャロラインやイザベラ・ボンカッセン、そしてウィニフレッド・ハートルのキャラクターについては、イギリス人の恋人に対する彼女たちの愛や葛藤が鮮やかに描かれていて、印象深い。既に見てきたように、この三人のキャラクターは、階級や男女のあり方に関するイギリスの伝統的な価値観に疑問を突きつける点で重要である。特に、ハートル夫人のキャラクターには、トロロープの「アメリカ」に対する反発と共感、また、翻って、自国イギリスの古い価値観に対するアンビヴァレントな姿勢が微妙に表れているといえよう。*The Way We Live Now* の一つの大きな興味は、一方で「家庭の天使」ヘッタを理想として掲げながら、「イングリッシュ・レディー」になれなかった「墮ちた女」、ハートル夫人を生き生きと描き出すことで、彼女を虐げる社会の「ダブル・スタンダード」そのものを問うていることである。これはある意味で、「アメリカ」と「イギリス」の関係を越えた、女性に関する根本的な問題をも示唆するものであり、晩年のトロロープが様々な作品で、形を変えて追求し続けていくテーマであるのだ。

注

- (1) トロローブは特にアメリカ人女性キャラクターを好んで繰り返し描いたと思われる。アメリカ人男性キャラクターも何人か描いてはいるが、実際、Richard Mullen らの批評家が示唆するように、女性キャラクターの方が全般的に、より陰影のある興味深いキャラクターであることが多い(7)。
- (2) John Sutherland をはじめとする多くの批評家は、1861-62年の二度目のアメリカ訪問が、トロローブのフェミニズムに対する姿勢に強い影響を及ぼしたことを指摘している (xxi)。
- (3) この短編は、いわゆる「アングロ・アメリカン」の結婚を扱ったトロローブの最初の作品の一つといえる。以後の作品においても、「若いアメリカ人女性」と「年長で上流階級出身のイギリス人男性」というパターンが多い。
- (4) 実際、たとえば *The Duke's Children* では、当初息子とイザベラの結婚に難色を示した the Duke of Omnium が徐々に、この快活で美しいアメリカ人を義理の娘として受け入れていく様子が示唆されている。
- (5) トロローブは Olivia Q. Fleabody や *The Way We Live Now* の Hamilton K. Fisker など含め、好ましくないアメリカ人キャラクターには、概して「鼻声」という特徴を付している。
- (6) *Hamlet* の五幕一場でハムレットが、世の移り変わりを、「百姓のつま先」と「宮廷人の踵」に喩えて言い表す場面がある。“The age is grown so picked, that the toe of the peasant comes so near the heel of the courtier, he galls his kibe.” ワレイキアはこのハムレットの言葉を、自己流に変えて使っているのである。Sutherlandの“Explanatory Notes”, p.948を参照。
- (7) Diana C. Archibald は、ヴィクトリア朝のイギリス人がアメリカ人女性について、男勝りの“tomboy”と性的な魅力で男を惑わす“siren”という一見矛盾する二つのイメージを抱いていたことを論じている。pp.135-136を参照。
- (8) 19世紀半ばのアメリカにおける既婚女性財産法をめぐる動きについては、Norma Basch の“Invisible Women : The Legal Fiction of Marital Unity in Nineteenth-Century America”, pp.42-62を参照。

引用文献

- Archibald, Diana. C. *Domesticity, Imperialism, and Emigration in the Victorian Novel*. Columbia : U of Missouri P, 2002.
- Basch, Norma. “Invisible Women : The Legal Fiction of Marital Unity in Nineteenth-Century America.” *Women and the American Legal Order*. Ed. Karen J. Maschke. New York : Garland, 1997. 42-62.
- Dickens, Charles. *Martin Chuzzlewit*. Harmondsworth, Middlesex : Penguin, 1986.
- Heineman, Helen. K. *Three Victorians in the New World : Interpretations of the New World in the Works of Frances Trollope, Charles Dickens, and Anthony Trollope*. New York : Peter Lang, 1992.
- McMaster, R. D. “Women in *The Way We Live Now*.” *English Studies in Canada* 7 (1981). No. 1 : 68-79.
- Morse, Deborah Denenholz. *Women in Trollope's Palliser Novels*. Ann Arbor, Michigan : UMI Research Press, 1987.
- Moss, Carolyn J. “Anthony Trollope and Kate Field : The Story of a Friendship.” *Dickens, Trollope, Jefferson : Three Anglo-American Encounters*. Sidney P. Moss and Carolyn J. Moss. Albany, New York : Whitston Publishing Company, 2000. 31-53.
- Mullen, Richard, and James Munson, eds. *The Penguin Companion To Trollope*. London: Penguin, 1996.
- Nardin, Jane. *He Knew She Was Right : The Independent Woman in the Novels of Anthony Trollope*. Carbondale : Southern Illinois UP, 1989.
- Sutherland, John. Introduction and Explanatory Notes. *He Knew He Was Right*. By Anthony Trollope. Oxford : Oxford UP, 1992. vii-xxiii. 931-952.
- Trollope, Anthony. “The Courtship of Susan Bell.” *Anthony Trollope : The Complete Shorter Fiction*. Ed. Julian

- Thompson. New York: Carroll & Graf Publishers, 1992. 17-40.
- \_\_\_\_\_. *The Duke's Children*. Oxford : Oxford UP, 1991.
- \_\_\_\_\_. *He Knew He Was Right*. Oxford : Oxford UP, 1992.
- \_\_\_\_\_. *Is He Popenjoy?* Oxford : Oxford UP, 1991
- \_\_\_\_\_. *The Letters of Anthony Trollope*. Ed. John Hall. Vol. I. 1835-1870. Stanford : Stanford UP, 1983.
- \_\_\_\_\_. "Miss Ophelia Gledd." *Anthony Trollope : The Complete Shorter Fiction*. Ed. Julian Thompson. New York : Carroll & Graf Publishers, 1992. 403-419.
- \_\_\_\_\_. *North America*. New York : Da Capo Press, 1986.
- \_\_\_\_\_. *The Way We Live Now*. Oxford : Oxford UP, 1991.